



イランの体制危機

—対立の構図と今後の展開

鈴木 均

これまでの各論考によって、読者はイランが現在直面している体制危機の諸側面と、その問題の所在を窺い知ることができたのではないかと考えている。ここでは特集の最後に、イランの権力中枢において次第に浮上してきている政治的な諸グループとその対立・連携関係の概略を整理しておくことにしよう。

●ムーサヴィーとキャッルービー

一九四二年アゼルバイジャン生れのミール・ホセイン・ムーサヴィーは、革命直後の一九八一年一〇月からイラン・イラク戦争が終結してホメイニーの死去した一九八九年八月までの約八年間、革命政権の首相を務めた人物である。だがこの二〇年あまりは政府の要職を離れており、イランの若い世代にはほとんど無名の存在であった。その彼が改革派の大統領候補として名乗りをあげ、立候補予定だった前大統領のセイエド・モハンマド・ハータミーが最大の有力候補と目されながら「改革派の候補をムーサヴィーに統一するため」立候補を辞退したのは三月中旬のことである。

当初はほとんど注目されなかったムーサヴィーが、その後の二か月あまりの間に現職大統領職を脅かすほどの存在になった背景には、選挙運動側がインターネットのSNSサービスであるフェイスブックを活用し、緑色をシンボルカラーとするという効果的な選挙運動戦略があった。

それ故、ムーサヴィーは何らかの明確なメッセージをもって登場してきた運動の指導者ではなく、あくまでもアフマディネジャード体制に反対する諸グループのシンボリックな存在に過ぎないということになる。もちろん国民的な抗議運動の組織化において、シンボリックな指導者の存在は不可欠であるが、ムーサヴィーがこうしたシンボリックな役割を脱却して国民の進路について積極的なメッセージを発しうる存在になるかどうかは未だ未知数である。

他方メフディ・キャッルービー（一九三七年ロレスターン生れ）は革命の初期からホメイニーを支持しており、革命後は国会議員として活動してきた。一九八九年から二〇〇〇年からの二度、国会議長を務めている。こうした長い政治活動を経て

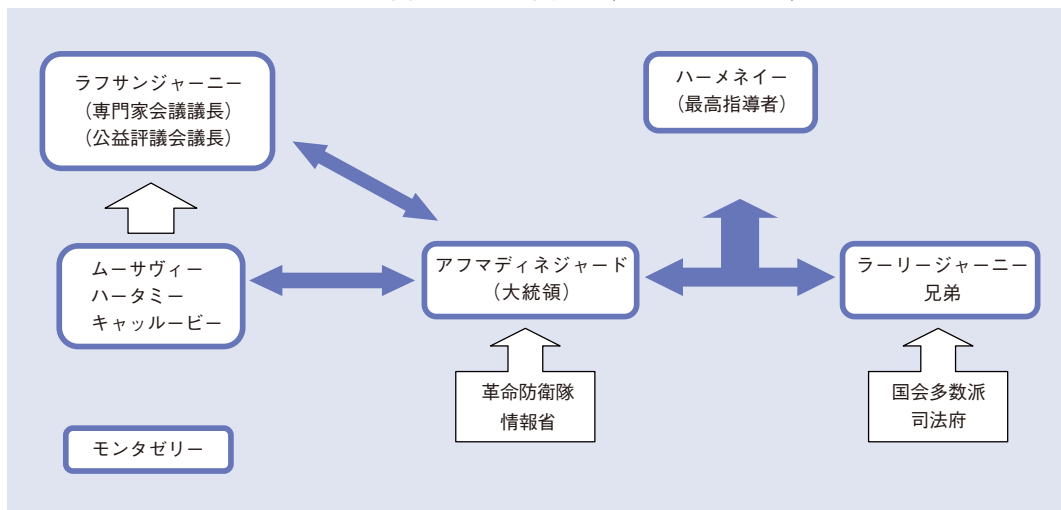
二〇〇五年に大統領選挙に立候補したが、開票報道中に「自分が仮眠を取っている間に」二位から三位に転落、この時以来、大統領選挙の不正を訴え続けている。

キャッルービーは今回〇・八パーセントの得票しか得られなかったとされるが、それでも彼の存在を無視することができないのは、八月一〇日以来抗議デモなどで逮捕された男女がテヘラン南部のキャフリーザ収容所でレイプを受けたと告発するなど、今回の選挙で「落選」した三候補のなかでも際立って活発かつ歯に衣着せぬ発言をしているからである。

こうした活動が可能な背景としては、キャッルービーの息子ホセインをはじめ同氏の所有する『エエテマード・メッリー』紙の若いスタッフらが実質的にキャッルービーの発言を支えてきたということがある。だが『エエテマード・メッリー』紙は八月一七日に当局より発行停止処分を受けており、以後はネット上での発行に限定されている。

これら二人の元候補に加えてハータミー前大統領、ムーサヴィー夫人のザフラー・

イラン国内の政治相関図（8月16日以降）



(出所) 筆者作成。
(注) 矢印は対立関係ないし従属関係を示す。

ラフナヴァルド、ホメイニーの孫ヤーセル・ホメイニーらが現在のイラン当局およびアフマディネジャード大統領に対抗する人物として、今後の展開によっては浮上してくる可能性を秘めているように思われる。

●アフマディネジャードとラーリージャーニー兄弟

今回の政治危機の台風の目を演じているマフムード・アフマディネジャード（一九五六年生れ）は、セムナン州ギアルムサル近郊の出身で、家族とともにテヘラン市東部に移住して成長、学生時代に反シャー運動に身を投じ、革命後は革命防衛隊に入隊してイラン・イラク戦争に従軍、その後はアルダビール州知事やテヘラン市長など地方行政畑を歩んできた人物である。

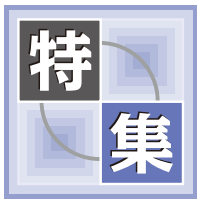
最高指導者ハーメネイーに見出されて前回の大統領選挙に立候補した際、当初はまったく無名であったにも関わらず、選挙期間中テヘラン下町出身の庶民派として急速に支持を拡大していった。その背景には、ハーメネイーの強い支持と革命防衛隊の後ろ盾があったことは疑いない。アフマディネジャードは当選後の四年間に全国三〇州を二巡して回り、行く先々で住民に直接嘆願書を書かせ、

インフラ整備や社会福祉を手あたり次第に実施してきた。

しかし国際的な石油価格の異常な高騰を背景にしたこうした大衆迎合策は、実際には各地方の地域社会に亀裂を生じさせ、革命防衛隊や下部組織のバシージュに加わった人間とそうでない人間のあいだに覆いがたい対立を生み出してきた。それは他方で革命防衛隊およびバシージュが短期間のあいだにイラン社会のなかに組織を拡大させていく際の原動力となった。アフマディネジャード政権としては第二期を無難にスタートさせ、その後の四年間でこの方向をさらに推し進めることこそが最大の優先事項であった。

革命防衛隊は革命直後の一九七九年にホメイニーの命令によって組織され、その後イラン・イラク戦争（一九八〇―八八年）の際には、国軍よりも遥かに積極的に前線において戦ったとされる。また現在その下部組織になっているバシージュは、元々イラクとの戦争時における自発的な義勇兵組織であり、現在の保守強硬主義的な自警団組織とは全く性格を異にしていた。もっとも、現在地方都市部まで含めて広範に組織されているバシージュの底辺部分は、むしろイデオロギー的な色彩の薄い青年会的な組織であると思われる。

大統領就任直後から対イスラエル強硬発言などで国際的な物議をかます一方で、国内政策ではポピュリスティックな手法で革命防



衛隊の影響力を拡大してきたアフマディネジャードに対し、同じ保守派でありながら高位聖職者の家系出身として社会的な基盤をまったく異なるラーリージャーニー兄弟が、現在体制内部の大統領に対する対抗軸として次第に浮上してきている。

ここでラーリージャーニー兄弟とはアラーラーリージャーニー国会議長（一九五八年生れ）とサーデク・ラーリージャーニー司法府長官（一九六〇年生れ）の兄弟のことであるが、八月二五日にハーメネイーが任命したサーデク・ラーリージャーニー司法府長官は、七月にアフマディネジャードの罷免したエージェーイー元情報相を八月二四日に検察長官に任命、また八月末には抗議者の集団公判を主催したテヘラン検事長官のモルタザヴィーを配置転換して穏健なドウラターバーディーを同職に就けている。

兄のアラー・ラーリージャーニーは国会議長として八月二〇日以来アフマディネジャードの提出した新閣僚候補の審議に関わり、国会が閣僚候補の多くを否認した場合には新政権のスタートが危ぶまれていたが、結局「信任による国民の結束」を求めたハーメネイーの発言を受けた九月三日の信任投票で3人を除く新閣僚の多くを承認している。

ラーリージャーニー兄弟のアフマディネジャードと拮抗する動きは最高指導者ハーメネイーの意向を受けたものと思われるが、

今回の新閣僚信任の結果をみてもこの動きがどこまで通用するかは明らかでない。今回の一連の政治危機の動きのなかではむしろマイナーな動きと捉えるべきなのかも知れないが、いざれにしてもラーリージャーニー兄弟は現在三権のうち二つを率いているだけに、今後の事態の進展によっては重要な役割を果たす可能性もあり得る。

● ラフサンジャーニーとハーメネイー

アヤトツラー・アリー・アクバル・ハーシェミー・ラフサンジャーニー（一九三四年生れ）とアヤトツラー・セイエド・アラー・ハーメネイー（一九三九年生れ）との関係は、革命後三〇年間のイラン政治抗争史の大きな部分を占め、また長年にわたる連携と対立の微妙な問題を含んでもいる。だが非常に単純化していえば、ラフサンジャーニーが革命後のイランの世俗化の方向をある程度容認し、国際的孤立からの脱却を模索、革命体制内での改革派の成長を促す姿勢を取ってきたのに対し、ハーメネイーは米国・イスラエルの覇権に敵対し、ホメイニーの革命イデオロギーを堅持・輸出することに腐心してきた。

一九八九年六月三日のホメイニー死去に際し、かねてアヤトツラー・モンタゼリーを後継者に指名しながら最晩年になって翻意したため混迷化していた最高指導者の後継問題について、モンタゼリーを

政治の舞台から排除し、ハーメネイー指名ということで実質的に調整したのはラフサンジャーニーであったといわれる。だがハーメネイーは最高指導者就任後、次第に彼自身の政治的な信念を前面に出すようになっていった。他方ラフサンジャーニーは大統領としてイラン・イラク戦争後の復興事業に辣腕を發揮する一方で、ネポティズム的な手法で莫大な私財を蓄積し、改革派論客のアクバル・ガンジーらがこの点を鋭く批判したことによって二〇〇〇年の段階ですでに政治家としての名声は地に落ちていた。

二〇〇五年の大統領選挙の決選投票でアフマディネジャードがラフサンジャーニーを破った際にも、彼はこうしたラフサンジャーニーの古傷を攻撃して庶民の喝采を得ることに成功した。アフマディネジャードはハーメネイーの厚い信任と革命防衛隊の後ろ盾によって当選し、その後の四年間は革命防衛隊の権力伸長のために力を尽くすことになる。

だがハーメネイーの主張を忠実に体现しようとするこうしたアフマディネジャードの政治的方向性は、当然ながらラフサンジャーニーの許容するところではなかった。ラフサンジャーニー自身は改革派という枠に納まる政治家ではないが、今回の選挙期間中は改革派候補のムーサヴィーやハタミー、保守派候補のレザーイーらと連携しつつアフマディネジャードの再選を阻止す

る方向で調整・裁定を行っていたように思われる。

このような立場にあったラフサンジャーニーが、選挙後の騒擾の過程で七月一七日に金曜礼拝に登壇し、国民の意志を汲まない体制側の浅慮を批判する演説(フットベ)を行ったことは、今後の展望を考える上で極めて重要な意味をもっている。それはこの四年間ハータミー・アフマディネジャードのラインに大きく傾いていたイラン国内の政治動向を再びハータミー vs. ラフサンジャーニーの双頭体制に実質的に揺り戻させつつあるともいえる。だがそれだけでなく、ラフサンジャーニーに対する国民的な支持の急激な回復に伴って、ハータミーの最高指導者としての権威も相対化され、従来の革命防衛隊を軸とする国家防衛体制の構築戦略に大きな修正が加えられてくる可能性が少なくないからである。

●国民の参加と国際社会

このように体制内の権力関係が短期間のうちに大きく変動しているのは、言うまでもなく六月一三日以降の抗議運動が国民的な規模に達し、しかもそれが官憲側の度重なる暴力にも関わらず長期的に続いたことで、ハータミー・アフマディネジャード―革命防衛隊体制に対する大多数のイラン国民の否認が明確な意思表示として内外で受け止められている結果である。

八月に入ってから表面は大衆行

動は組織されておらず、テヘラン司法当局による反対派逮捕者の集団公判や新大統領の就任式、新閣僚名簿の国会審議など、体制側の主導で少しずつ既成事実が積み重ねられてきているようにも見える。だが八月22日から始まったラマザン月の断食も九月二〇日頃には明け、九月三日には全国の大学や高校が新学期を迎える。イランの体制側は、この時期に再び国民的な大衆運動が高揚することを最も警戒しているものと思われ、事実新学期を前に各大学が休校ないし閉鎖を余儀なくされるのではないかと観測も盛んに流れている。

ここで国際的な問題に目を転じると、今年の一月に発足した米国のオバマ政権は、ブッシュ前政権から大きく対イラン政策を「対話」路線に転換しており、これまでイラン側に対して度々メッセージを発してきている。この路線は六月一三日以降も基本的には継続しており、とくに核開発問題におけるイラン側の対応を注視しつつ静観している段階である。

だが、米国・EU側が期限と定めた九月の下旬までに、イランがこの問題で具体的な提案を示せるかどうかは不透明であり、最悪の場合には新たな経済制裁の発動も否定できない状況である。とくに今回の騒擾では、海外の報道メディアの締め出しや英国大使館・フランス大使館のスタッフの拘束、さらに両国大使館の現地スタッフの出廷と証言の明らかな強制などがあった。こ

のためドイツを含めたEU主要国は対イラン姿勢をこれまでになく硬化させており、もし経済制裁が発動された場合にはイラン経済に対するダメージの点でかなりの実効をともなったものになる可能性が少なくない。

六月一三日以降のイランの国民的な抗議運動は、悲惨な流血をとまなうものであったとはいえ、中東・イスラーム世界における市民社会の成熟の新たな方向を示唆するものであった。だがイランも他の多くの国々と同様、国政選挙における国民の投票行動は「悪い政府か、より悪い政府か」の選択であるに過ぎない。これは今回の抗議デモに参加した国民の多くですら日常的には深く自覚していることであろう。

現在のイランの権力体制もまたそれを支える政治的な陣容も、グローバリゼーションが浸透した若いイラン国民の意識との間に決定的な乖離が生じてしまっていることはもはや否定しようもない事実である。「もっとマシな政治を」という切実な要求が国民の一般意思としてここまで広く表明され共有されてしまった以上、旧体制は遅かれ早かれ転換されなければならない。これはいわば歴史の必然であり、何もイランのみが特殊ということではないのである。

(すずき ひとし/アジア経済研究所
新領域研究センター)



参 考 資 料

アフマディネジャード第二期 閣僚候補者リストと承認状況
(2009.8.20-9.3)

職名	名前	性別	防衛隊歴	継 続	前 職	学 位	経 歴 等	可能性	当 落
教育相	ケシャーヴァルズ、スーサン	○		△	教育副大臣	PhD		△	×
通信相	タキープール、レザー				通信会社社長				○
情報相	モスレヒー、ヘイダル		○		バシージュにおける最高指導者の代理、大統領アドバイザー		防衛隊の情報部門の高官。モジュタヘドの要件を欠く。ハーメネイーの側近。アフマディネジャードの盟友。	△	○
経済相	ホセイニー、シャムセッディーン			○	経済相	PhD		○	○
外務相	モッタキー、マヌーチェフル			○	外務相		国会議員、在日本および在トルコ大使。	○	○
保健相	ダストジェルディー、マルズイーエ・ヴァヒード	○			婦人科医		国会議員。		○
協同組合相	アッバーサー、モハンマド			○	協同組合相		国会議員。		○
農業相	ハリリヤーン、サーデク				大学教員	PhD	農業副大臣。		○
運輸相	ベフバハーニー、ハミード			○	運輸相	PhD	科学技術大学の学部長。		○
社会福祉相	アーゾルルー、ファーテム	○			保守派の国会議員		アッバース・パーリーズダール擁護で批判を受ける。	×	×
鉱工業相	メフラービヤーン、アリー・アクバル			○	鉱工業相、大統領アドバイザー		アフマディネジャードの盟友。		○
科学相	ダーネシュジュ、カムラン				内務副大臣、内務省大統領選挙委員	PhD	前テヘラン州知事。		○
文化指導相	ホセイニー、モハンマド				科学副大臣		国会議員、テヘラン大学教員。		○
労働相	シェイホルエスラーミー、アブドルレザー				大統領府長官、大統領アドバイザー	PhD	科学技術大学教員。		○
内務相	ナッジャール、モスタファー・モハンマド		○	□	防衛相		防衛隊高官。軍需産業機構長官。80年代に対アラブ諸国秘密工作に関与。ハーメネイーおよびアフマディネジャードの側近。	×	○
都市開発相	ニークザード、アリー				アルダビール州知事		アルダビール州都市開発機構長官。		○
石油相	ミールカーゼミー、マスード		○	□	商業相	PhD	前防衛隊(シャヒード)大学副学長。アフマディネジャードの盟友。	×	○
エネルギー相	アリーアーバーディー、モハンマド			□	副大統領、体育振興機構長官			×	×
法務相	バフティヤール、モルテザ				エスファハーン州知事		国家監獄機構長官。		○
防衛相	ヴァヒーディー、アフマド		◎		革命防衛隊長官、防衛副大臣		ヒズボラーと関係。1994年のアルゼンチン・テロで国際手配。	△	◎
商業相	ガザンファリー、メフディー			△	商業副大臣		貿易振興機構長官。		○

(出所) 各種報道より筆者作成。

(注) 1) 「性別」の欄の○は女性を意味する。

2) 「防衛隊歴」の欄の○は高官として関わった者のみであり、革命防衛隊の出身者はこれよりも遥かに多い。

3) 「継続」の欄の○は同じ大臣職の継続を、□は別の大臣職からの異動を、△は副大臣職からの昇格を意味する。

4) 「可能性」とは「国会での承認の可能性」の意味であり、○は発表直後に保守系の「ハバル」紙が承認を予想した候補者、×は同紙が否認を予想した候補者、△は別の情報から否認が予想される候補者を意味する。

5) 「当落」とは9月3日の国会による信任投票の結果であり、○は信任された候補者を、×は信任されなかった候補者を意味する。◎は最高得票者(286票中227票)。

【解説】 今回の大統領選挙では抗議運動が国民的規模で盛り上がり、体制を大きく揺さぶったため、新閣僚の任命に際しても国会の承認が容易には得られないのではないかと観測が信任投票の直前まで支配的であった。アフマディネジャード大統領は8月20日の深夜に新閣僚候補者リストを国会議長に提出し、3日間にわたる国会の審議でも激しい応酬が行われた。だが「国会議員は信任票を投じて国民の団結を示せ」との投票直前の最高指導者ハーメネイーの発言により、9月3日の投票では21人の候補者のうち3人のみが否決され、18人は閣僚のポストに就くという結果になった。

この一覧表はアフマディネジャードが20日に提出した閣僚候補者リストであり、最終的な閣僚名簿ではないが、この表からアフマディネジャードが第2期においてどのような政策を目指しているかを窺い知ることができる。それを簡単に要約すると、①治安・情報関係および石油相に革命防衛隊の高官出身者を配しており、これらの分野を特に掌握しようとしている。②外交および経済関係は継続して任命される大臣が多く、大きな路線上的変更を予定していない。③教育や保健関係に3人の女性閣僚を任命しているが、これは国民の人気取りもさることながらイスラーム的な規範の徹底を進めようとしているのではないかと。以上である。(鈴木 均)